

〈母〉の〈夢〉、〈物語〉の〈夢〉、

谷崎潤一郎の、

——「母を恋ふる記」をめぐって——

二瓶 浩明

〈母〉恋い物語の結末は、はじまる前からずで見えてくる。それはいつも〈母〉と彼との出会いで終る。そしてその出会いが、〈母〉の〈死〉、〈不在〉を告げるものであるとすれば、そもその初めに彼はいつのまにか立ちもどっている。彼は閉じられた円環Ⅱ〈夢〉Ⅱ〈物語〉のなかで、永遠に果てしない〈夢〉を見つづけ、〈物語〉を紡ぎつづける外はない。それを不幸といおうと、幸福といおうと、実は同じことなのだ。それは〈物語〉の見かけに過ぎない。

〈母〉がない（不在・欠如・未知）↓探す・求める（探索・思考・旅）↓彼女と出会う（一致・所有・認識）という〈物語〉の骨格・筋書と、〈母〉を〈真実〉や〈理想〉、あるいは〈女〉等と置き換えることによって、成長・発展の過程とが、類同性を持つていることは、容易に見見されることではあろう。にもかかわらず、この〈物語〉はあらかじめ底が割れている（〈母〉の死、不在を出発・帰着点とする）点において、自足する円環の外に出ることはなく、およそ楽天的な〈近代〉という〈物語〉、自我の確立とか理想・真実の追求とかいう、単一の直線的な文法を持つ〈物語〉とは、事情を大いに異にしていたと言えるだろう。勿論、このことはまるで逆に言うことも可能である。〈母〉恋い〈物語〉とは、穴のあけられた開かれた迷宮ミゼリスなのであり、やがて袋小路に至る閉じられた迷路、〈近代〉という〈物語〉とは似ても似つかないも

のであった、と。

近代日本の文学において、反・非・前近代的と言われる作家たちによって、この〈物語〉が選び取られてきたことは偶然ではない。そしてこの〈物語〉のコードに沿って、入手される宝物が若くて美しい、〈母〉に違いないことも自明のことであった。

谷崎潤一郎といえは、まるで絞切型ステレオタイプのように言われつづけてきた「母性思慕」、〈母〉恋いの主題について、多少考えてみたいというのが本稿の企てであるが、その最も早いあらわれの一つ、その最も端的な「母を恋ふる記」という作品を手がかりにしたいと思う。

↑1↓

一九一九年（大8）一月から二月にかけて、「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に断続的に連載発表された小説「母を恋ふる記」は、以下のような出だしではじまっている。

……空はどんよりと曇つて居るけれど、月は深い雲の奥に吞まれて居るけれど、それでも何處からか光が洩れて来るのであらう、外の面は白々と明るくなつて居るのである。その明るさは、明るいと思へば可なり明るいやうで、路ばたの小石までがはつきりと見えるほどでありながら、何だか眼の前がもや／＼と霞んで居て、遠くをじ

つと見詰めると、瞳が擦つたいやうに感ぜられる、一種不思議な、幻のやうな明るさである。何か、人間の世を離れた、遙かなく無窮の国を想はせるやうな明るさである。その時の気持次第で、闇夜とも月夜とも孰方とも考へられるやうな晩である。しろくとした中にも際立つて白いとすぢの街道が、私の行く手を真直に走つて居た。街道の兩側には長い松並木が眼のとゞく限り続いて、それが折々左の方から吹いて来る風のためにざわ／＼と枝葉を鳴らして居た。風は妙に湿り気を含んだ、潮の香の高い風であつた。きつと海が近いんだなど、私は思った。私は七つか八つの子供であつたし、おまけに幼い時分から極めて臆病な少年であつたから（以下略）

一読、これが夢であることは明らかだ。何も作品末尾において「眼を覚ました」「夢」を見ていたという自解・種明かしがなされるまで、読者聞き手が、いま語られて、いるのが夢であることに気づかぬほどに愚鈍であつた訳もあるまい。それが夢であることは、直ちに知れることなのだ。

「何か人間の世を離れた、遙かなく無窮の国を想はせるやうな明るさ」という、胡散臭い説明がそのことを教えているのではない。読者聞き手は冒頭の一行「空は……けれど、月は……けれど、……だろう、（しかし）……である。」からして、これを夢だと知るに違いない。あやふやなもの、不確

かなものを拙ない語調のままに語りはじめる喰い、不安が、ゆっくりと断定、直叙へとすりかわってゆく過程、意識の変容感とでも言うべきものが、入眠感覚の相同であり、読者聞き手を夢のなかへと誘い込む「夢語り」の山口であることを、彼は先験的、無意識的に知っている。「……なんだなど私は思った。私は……だつたし、……だつたから」という文章も語りも、そのことを補完する文脈に叶っている。すぐさま反転し、自己帰結する根も葉もない自身と外界との無根拠な同定は、夢の最も素朴で素敵な感覚の一つである。たちまちのうちに語り手がそこに溶け込み、一体化した主人公・「私」は、もうすっかり夢のなかにいる。そして読者聞き手もまた、彼と一緒に「夢」のなかを歩みはじめようとしている。

かくて「夢」の主人公・少年は、長い遠い道を「母」に向かつて歩み出すが、その目的地もまた、初めから知れていて、作者によつて「母を恋ふる記」と標題を与えられ、夢を語る「夢語り」、とりあえずは「物語」と言っておきたいが、その外から彼によつて読者聞き手は進むべき方向をあらかじめ指示されていたから。夢の主人公・少年が夢見るよりも早く「物語」のうちに自足し、語り口のなかにしか顔を持たない機能的な存在「語り手」は、そのなかからは一步も出られない。語り手、「私」がそう言っていないとすれば、作者が「物語」の外に「母」と命名したに違はなく、「母」という宝物を、あ

らかじめ無残にも白日のもとにさらけ出し、出口を明示していたと解すべきであろう。そして語り手「私」は、夢から醒めた後に、その始終を語るのだから、彼もまた結末を知っている。しかし彼の語る〈物語〉とは、主人公の少年・もうひとりの「私」とともにもう一度〈夢〉を生き直すという点にこそ真骨頂を求めるべきなのであり、とうに結末(死)の知れた夢の顛末を、いかにうまい嘘をつきつつ遅延させてゆくか、ということがその真実性・信憑性を保証するのである。このことは〈物語〉のなかの生への欲動と死への欲動との格闘という言葉で説き明かすことができるが、当面の関心の外にあるのでいまは言うまい。作者——語り手について語る際に、作者が語り手を操る高みに立って不動である、というのは迷信なのであって、彼は語り手の語る〈物語〉そしてそのなかに取り込まれた擬制・主人公が辿る原〈物語〉の、その双方を動かし、双方から動かされていたことはいままでもない。それにしても、語り手という機能を呼び寄せて、〈物語〉を獲得しようとしつつも、それが夢語りという素朴なものではなく、かつ入手した〈物語〉を〈母〉という言葉でもつて露骨なまでに縛りあげる作者の拙なま、苛立ちが見えているのは何故なのであろうか。

とまれ、少年の前にある道が、見えすいた道Ⅱ「真直に走つて居た」「白い」とすぢの道」であつたにもかからわず、そ

の道は遠く長く、だからこそいかにも夢の感覚をよく伝えていたのである。

行つても行つても行き着かない不安や心細さ、先に進むしかない半ば強制化された悲哀や恐怖の感覚は、それこそ夢の身上のひとつであるに違いない。長く細い遠い道をひとり歩む少年の心情のうちに、それはよく描かれている。そして夢のなかで旅する少年Ⅱ「私」と、夢を見ている「私」の意識の「二重化」(例えば「私は七つか八つの子供であつたし」という「私」の意識がそれだ)が、夢の文法であり、〈物語〉の文法でもあつたことは分り易いことだ。

夢のなかでこれが夢だと知っていること、変身したものがそれ以前の意識を持つていること等、夢がいつも忘我的な恍惚感・熱狂を有するものではなく、すでに夢への批評を孕んでいることは、珍しくも何ともないことだ。この点でもこれはいかにも夢らしい。その上に立って次のことを言うべきなのだ。夢の多くはそのままでは辻褃の合わぬ混乱した無秩序なものであつて、いちじるしく筋の統一・均衡を欠き、それを語るときには〈物語〉の文法を要求すると。そのとき〈物語〉の語り手は、夢のなかの夢見る「私」・もうひとりの「私」と一致している。理性の支配を離れ、半覚醒のままに夢を吐き散らそうとする超現実主義者たちの自動筆記のあり方は、語り手を排除することによって散乱した記号の海、夢の無意識

を詩的^{イマージュ}心象として掬い取ろうとする試みであったが、すでに醒めてしまった夢を語ろうとするとき、〈物語〉は夢を捉えて離さない^{まぎ}。

少年の眼の前に延びる道は、長く遠く果てしなく続いていく。この長い道のりこそが、彼が〈母〉に行き着くために溯行しなければならぬ時間・距離なのであった。夢から醒めた「私」は言う。「自分は今年三十四歳になる。さうして母は一昨年の夏以来此の世の人ではなくなつてゐる」と。とすれば、いま三十四歳の「私」が〈母〉に出合うために、「七つか八つの子供」に変容しなければならぬのであり、その長い長い道のりは、無媒介^{アフリオリ}に設定されていた七・八歳という年代を獲得し、彼になり終えてゆくための距離・時間であったといえようか。

七、八歳という年代について、作者↓谷崎潤一郎はどうかから固着した傷痕にも近い意識を持つていたらしい。家が没落し、生まれ育った土地を離れなければならなかったのもこの時期であるし、弟が、生まれて、〈母〉を奪われていったのも、大体はこの時期に当たっていることが、繰り返し回想に述べられている。それ以来、母は所帯やつれをして、貧窮のままに死んでゆくのだが、この間の彼女が憐愍の対象であり、侮蔑の対象であったことも矢張り彼によって語られていることである。これを作者↓谷崎潤一郎に引きつけて読むならば、二

つの時期の間を溯る長い道は、この間に彼が母に対して抱き続けてきた憎しみ・拒否を、洗い流してゆく過程であり、〈母〉に至る道の遠きは、彼女を距ててきた〈罪〉の大きさに見合つていたと言ふことができよう。だが、勿論、語り手の「私」と作者↓谷崎潤一郎とを混同してはならない。ただ〈夢〉Ⅱ「作品」を通して参照し合つていだけなのだから。

「私」の行く道は遠く、長く果てしなく続いていく。やつと一軒の百姓家を見出した彼は、そこで〈母〉と出合うことになるが、それは第一の〈母〉Ⅱ現実の母に過ぎない。第二の〈母〉、彼を抱きしめてくれる美しい理想の〈母〉に出合うためには、さらに「二年も三年も、ひよつとしたら十年も」歩き続けなければならない。

〈2〉

二人の〈母〉がいる。彼女らは一方が偽せて、他方が本当ということはない。一は、現実の母への憎しみより発し、他は理想の母への憧憬に発していたとしても、ともに〈夢〉が作りあげた〈幻〉なのであって、そのなかでしか出合うことのできない人々なのである。だからその出合いも、先のそれが仮であつて、後が真実ということもない。結局「私」は、母に合わなかつたと言つても良いのだから。

「私」が〈母〉に至る道のほとりには、無数の記号がばら

撒かれている。〈海〉〈沼〉〈月〉について述べてみたい。そして〈狐〉〈三味線〉〈乳母〉〈姉〉について、次に述べよう。

道の右手に〈海〉が広がり、左手に〈沼〉がある。一は流動し生きており、他は激み死んでいることから、〈海〉↓生、〈沼〉↓死という精神的な解釈が導き出されてきたが、^{註4}とすれば、生死のはざまの細い道が、〈母〉に行き着くための苦難の道、それゆえに宗教性を帯びており、胎内へも続く道だというのは、いかにもうまきはまり過ぎて、かえって納得できない気がするのはどうしたことだろう。

〈沼〉が関わるのは第一の〈母〉だけであり、〈海〉は二人ともに連続している。醜怪な老女・第一の〈母〉が、〈沼〉（↓死）によって隠喩化されていたことにも、かくも同意するとすれば、〈沼〉は確かに死んだ記憶、動かぬ固着したものとして老婆のなかに封印されていたと言えようか。ところが、覚醒後の「私」によって語られる現実の母の死が、実は「一昨年の夏」のことであったとすれば、かく理解しなければならぬはずなのだ。〈母〉はすでに七、八歳のときに若く美しいままに（↓第二の〈母〉）死んでいたのであり、現実の母（↓第一の〈母〉）は、それ以来その実際的な死の時期（一昨年）まで、老残を晒すものとしてしか「私」には映じていなかったのだ、と。記憶の古沼に沈めたものは、この間のすべての母なる人の醜悪な姿だったのであり、彼女と関わった歴史・

時間なのであった。第一の〈母〉に拒否されたとは、彼女を現実の母を拒否した謂に外ならない。現実の母の死（現在）の代わりに、理想の〈母〉、とうに死んでしまった〈母〉（過去）を、〈夢〉のなかに蘇生させ、起源にもどらうとする転倒こそが「私」の、〈夢〉の、さらには〈物語〉の意志に違いない。〈母殺し〉^{マトリサイド}をした時点で溯り、失くした〈母〉に出合うという〈物語〉〈夢〉にあらわれた〈沼〉は、とすれば「私」の母を葬り去った〈罪〉の沼であったかもしれない。

そして〈海〉が二人の〈母〉を結びつけているとすれば、〈海〉↓生、〈沼〉↓死という二分法は、うまく当てはまらないのであって、いっそ解りやすく、〈海〉(MER) ↓ 〈母〉(MERE) 〈海〉↓生み・産み ↓ 〈母〉・始源と言ってしまうが良いのだ。もとより一義的に〈母〉なるものを〈海〉に引きつけるつもりもまったくなく、かつ作中の海の諸相について言及せねばなるまいが、そんな暇はない。〈海〉に沿って歩く少年が〈母〉に出合うことは必定だったはずなのだ。なるほど彼は一人、一人で歩いている。傍らに誰もいなくても恐くはないし、第一の〈母〉に拒否されても嘆き悲しむことはなかった、それもそのはずなのだ。はじめから彼は〈海〉∥〈母〉とともにあり、その懐ろのなかで守られていたのだから。

〈月〉も事情は〈海〉に似ていると言えようか。〈月〉も「私」をつねに照らし続け、見守っているものである。彼はだから

こそ途方もなく長い道を中途で投げ出すこともなく〈母〉に行き着くことができる。作者↓谷崎潤一郎は後年の談話「佐藤春夫と芥川龍之介」(一九六四)において、「母を恋ふる記」は佐藤春夫の「月の美しさ」を描いた短篇「月かげ」に影響されて書いたと告白しているが、この発言が〈月〉(の美しさ)↓〈母〉(の美しさ)という含意コトバシヨウを持つていたことは言うまでもないだろう。美しい〈母〉、第二の〈母〉が、〈月〉の化身として現われていたことに、読者↓聞き手はすぐに気がつくに違いない。そしてその明るさについてもとうに別解ワカは出されてはいるのだが、それらには触れずとも良いであろう。ここにはその明るさが、〈母殺し〉の〈罪〉が晴れ、〈母〉に至る樂天性を保証していたことを指摘しておこう。もしかしたらそれは、〈母〉恋いという〈物語〉形式に抱く語り、手↓作者の樂天性、安易さを覗かせているものかもしれない。

芥へ渡る〈月〉の光のなか、後に「私」の〈母〉だと名乗る女が泣いている。「小母さん小母さん、小母さんは泣いてゐるんですね」と問えば、彼女は「これは月の涙だよ。お月様が泣いてゐて、その涙が私の頬の上に落ちるのだよ」と答えるだろう。「ねえ小母さん、何がそんなに悲しくつて泣いてゐるんです」と問えば、「お前は何か悲しいとお云ひなのかい?こんな月夜に斯うして外を歩いて居れば、誰でも悲しくなるぢやないか。お前だつて心の中ではきつと悲しいに違ひ

ない」「悲しいのは月のせぬなのさ」と答える女が、〈月〉の精であることを疑つてはいけない。彼女は「私」が抱いている「理由の知れない無限の悲しみ」が、奈辺に由来するのを示している。

落魄の悲しみばかりではなく、「理由の知れない無限の悲しみ」が、「私」の胸中にはあるという。それが「私」を先に進めている原因なのだ。言うまでもない。〈母〉がいなければこそ悲しいのだ。真つ先にかく解さなければならぬ。この根元を押さえないと、とんでもない思い違いに陥るであろう。

恐らくは〈母〉に逢えるであろうから、〈海〉や〈月〉が予兆的にそのことを語っているから、悲しくても「私」は泣かない。ところが、〈母〉もまた悲しいとすれば、彼女の悲しみとは一体何に起因するのであろうか。それは「私」の幼ないときに彼女がすでに殺されてしまっていること、「私」によって〈夢〉のなかに封じ込められてしまったことの悲しみに違いない。〈母〉と子の悲しみは別物ではなく、夢の感情は夢見る人間の外に出ないことを原則とするなら、その悲しみは次のように言つて構わないのである。〈母殺し〉(↓現実の母、第一の〈母〉)をしたことによつて、彼女(↓理想の母、第二の〈母〉)を〈夢〉のなかに宙吊りにしてしまわざるを得ない。「私」の悲しみ、〈母〉の不在を知りつつも、〈夢〉を見ざるを得ない不毛な〈生〉の悲しみが、それであると。「私」が出

合ったのは、〈母〉の不在という「私」自身の悲しみなのであり、〈夢〉と知りつつ〈夢〉を見る徒勞にも似た〈生〉の悲しみであった、と言うことも可能である。とすれば、「私」はついに〈母〉に出会うことはない。

〈母〉恋いの〈物語〉とは、〈母〉と出会う〈夢〉のなかで、不毛な〈生〉の悲しみを癒そうとする試みなのであり、そこでは〈生〉の悲しみと「理由の知れない無限の悲しみ」は、〈母〉のいない悲しみとして形象化されていた。そしてそれがとてつもなく馬鹿下た〈夢〉であり、転倒した〈夢〉であったことも明々白々なのであった。分かり切っていること、〈死〉（〈夢〉の死、〈母〉の死）を孕み込んで、始源（〈夢〉、〈母〉）へと溯行する（「夢語り」）〈物語〉の初めと終りとが一致する場所に、何故語るのか、（何故〈夢〉を見るのか）という遁環が渦巻いている。

〈母〉を眼の前にして〈母〉の不在を突きつけられてしまうこと、それこそが〈母〉恋い物語の宿命・逆説だと言って構わないのだが、話にはもう少し続きがある。女に〈母〉だと打ち明けられた「私」は、優しく彼女に抱きすくめられている。甘い乳房の匂いを嗅ぎながら互いに泣きじやくる〈母〉と子の一体化した陶酔は、その退行性うしろめたさを思い知らさずにはおかないものだ。すなわち、夢から醒めた「私」、現実の意識が、ここにおいては自らの分別ある年代であるこ

とを確認させ、そのことによって夢を否認し、自己を処罰するのである。だが勿論、その埋め切れぬ痕口から再び見果てぬ〈夢〉が増殖してゆくのであるが、もつとも本作においては、この部分は量的にもごくわずかであり、覚醒後の意識で夢を反転させようとする（作者の）試みは、成功しているとは到底言い難いのであった。

さて〈狐〉についてのことであるが、第二の〈母〉が狐の化身のごとくに現われていたことはわざわざ引用するまでもないことだ。だが、二人の〈母〉のうち、第一の〈母〉はどうだったのであろうか。

先にも述べたごとく、（第一の）〈母〉に至る道の右手に〈海〉があり、左手には〈沼〉があるが、〈海〉についてはもはや言うまい。左手からは、カサカサと鳴る得体の知れぬ音が絶えず鳴り響き、魔者が白い歯をムキ出して笑っているようで気味が悪い。「私」が意を決して凝視すると、そこは一面の古沼であって、沢山の蓮が植わっている。そしてその紙屑みたいに干乾びた葉が、風の吹くたびに裏の白いところを見せて戦いでいるのであった。

葛ならぬ仏花・蓮であるところに胡乱な点はあるが、これが葉の裏を見せている↓裏見↓恨みという人口に膾炙し、かつまたこの作者↓谷崎潤一郎も「吉野葛」（一九三二）その他で何度も言及し、親しんでいた〈母〉恋い伝説、信太狐の物

語を踏まえていることも容易に気がつくことであろう。^手 第一の「母」に現実の母に拒否される↓拒否するのは、作者↓語り手「私」が、無意識のうちに隠し持っていた「恨み」に発するからだ。そしてそれは、「母」の「恨み」と言うことも可能である。第二の「母」は、「私」の「恨み」が解消されたとき、「狐」として出現する。そしてその正体、「母」であることを明かすのである。

先の「母」において未だ顕現していなかったものが、後の「母」において具現化されている例はこれだけではない。「三味線」もその一つであると言うことができるだろう。(第一の「母」に至るまでの少年の悲しみは「哀音に充ちた三味線を聞く時のやうな」悲しみであると語られていたが、(第二の「母」は、それこそ「三味線」に「悲しみ」を手にしていたのであり、「悲しみ」そのものに違いはなかった。その「悲しみ」に「三味線」の音は、「海」の音、「月」の光とならんで「私」に絶えず囁きかけている。それは幼年期に「私」を導く、優しくも悲しい音色を持っている。やつと姿を見せた「母」が、「悲しみ」に「母」の「不在」・「死」という「三味線」を持つていたことに、「母」恋い「物語」の宿命・呪いを嗅ぎ取らずにはいられない。「天ぷら喰ひたい、天ぷら喰ひたい……」と響く「悲しみ」に「三味線」の音は、夢から醒めた「私」の耳に消えることはないだろう。その音は夢と現実の双方に風穴

をあけ、彼を再び「夢」へと駆り立ててゆく。

ぶくぶくの木綿の二子の上に、ぼろぼろのちやんちやんこを着た老女は、「お前は誰だったかね。お前は私の倅だったかね」と「私」を誰何し、「私の倅はもつと大きくなつてある筈だ」と彼を峻拒している。四枚障子が締め切つてある家なかで、縄暖簾越しに話をする前の「母」と、美しく艶かしい後の「母」、傍らをともに歩みながらしんみりと語り合い、「何と云ふつて、お前は私を忘れたのかい？私はお前のお母様ぢやないか」と自ら名乗りを上げる「母」との違いは明らかだ。いずれにしても、彼女らは「夢」でしか逢うことのできない「幻」なのだが、逢つてすぐにそれと分かるようなものでもなかった。彼女らに行き着く前に、「私」は「乳母」「姉」を経由せねばならないのだ。

「小母さんと第二の「母」に呼びかける「私」は、実は「姉さん」と呼んでみたかったのだ。姉というものを持たない彼は、美しい姉を持ちたいという感情がいつも心のなかにあつて、彼女に呼びかける胸のなかには「姉に対するやうな甘い懐しい気持」が籠もつていたのである。それは作者↓谷崎の母・関が、生前は彼の姉ではないかと思はば訝しまれたほど美しかったことの転移かもしれないし、「母」とは別に、「姉」という遠くて近い未知なる女への憧憬に根ざしていたのかもしれない。だがそれはこの際どうでも良い。直截に「母」

に飛び込むことなく媒介を必要とする距離の遠さが傷わしい
気がするのである。

こうしたことは第一の〈母〉についても同様なのであって、
〈母〉がいない前に、まず〈乳母〉がいない。「考へて見れば
乳母が居なくなつたのも無理はない。私の家にはもう乳母を
抱えて置く程のお金がなくなつたのだ」という〈乳母〉は、
ひとり第一の〈母〉にのみ収斂すべきものではなく、第二の
〈母〉の〈乳〉にまで続いていくものではあるが、にもかか
わらず家事・家族・生活状態という家に関わり、現実を刻む
存在であることよつて、家の女、第一の〈母〉の前に語ら
れねばならなかつたものだ。

〈夢〉のなかに氾濫する記号が、すべて〈母〉の破片とし
て「私」の前に浮遊している。そのかけらをなぞりながら、
奥深くに隠匿されている〈母〉を探し当てるのが「私」の旅、
〈物語〉の意志、そして読者||聞き手の読書・享受体験とい
うことになるのだが、彼女がするりと反転してその〈不在〉
を告げるとすれば、「私」が出合い、〈物語〉が対面し、読者
||聞き手が見出し出すものは、それぞれの〈自己愛〉^{ナルシズム}としか言
いようのないものに違いないだろう。

〈3〉

作者↓谷崎潤一郎における〈母〉恋いの心情に対し、疑い

を持つことはまるで無意味なことである。彼は母の死につい
て「僕が生れて始めてほんたうの悲しみを味はつたのは母を
失つた時であつた」「佐藤春夫に与へて過去半生を語る書」
一九三二と述べているし、母の死後まもなく執筆された「ハ
ッサン・カンの妖術」(一九一八)にも彼女への真摯な愛を窺
うことができる。そうした心情のあり方は、この外の小説・
随筆等に数多くの証拠を見ることができであろう。そもそ
もが〈母〉恋いの動機なしに、〈母〉恋いの書かれるはず
もあるまいが、これは前提として、真つ先に仮想されなけれ
ばならぬ命題とも言うべきものだ。ところがその内奥は別と
して、谷崎は表面上は母に対してきわめて冷淡であつたらし
い。偽悪家の青年が無智で卑しい母に抱く嫌悪・憎しみの感
情については、「母を恋ふる記」のわずか二年前に発表された
「異端者の悲しみ」に十分に描かれており、それを見る限り
はどうも愛されなかつた子は偽悪家になるという俗説を、無
下に見捨てるのが出来ない気もしてくるのである。弟・谷
崎精二は、兄・潤一郎が母に疎まれていたこと、そのことを
彼がうすうす知っていたかもしれない(「潤一郎追憶記」一九
六五)と述べているが、愛されることと愛することとはまる
で別のことだとはいふも承知で言うとするなら、〈母〉恋いの感
情が母の死に直面して急に奔流しだしたとは容易に納得し難
いのである。それは三十過ぎの偽悪家、一筋縄ではいかぬ男、

売り出し中の気鋭の作家向けには到底顔面通りに通用するものではあるまい。

〈母〉とは真つ先に虚構・〈物語〉の装置なのであって、一義的には語り手↓作者の履歴とはまるで無縁のものと言へきなのだ。ただ〈物語〉を語る手順、〈母〉との出会い―〈死〉の追認、起源へと溯る倒錯のあり方筋書プロットに二義的に関わっているだけだ。〈母〉とは作者↓谷崎が必要とした〈物語〉形式と同一ホモロジック的なものであって、恋い慕う〈母〉を履歴に求めることは可能であっても、〈母〉恋い〈物語〉の由来をそれで証明することはできない。

母・関の死に遅れること二年にして書かれた〈母〉恋い物語、その名も端的な「母を恋ふる記」は、何故この時期に書かれたのか。二年の遅延が語りかけることまを読みほぐせば、作者↓谷崎と〈母〉〈物語〉との関係が浮き出るかもしれない。

「母を恋ふる記」執筆中に、父・倉五郎が死の床に就いている。彼はこの作の発表と相前後してこの世を空しくするが彼の無能と善良さと小心のために（谷崎はそう思っている）、生れ育った懐しい町を離れ、一家は都内を転々として貧窮に喘ぐことになった。その落魄の意識がこの作家に幼年期を祭り上げ、母への哀憐とともに父への憎しみを生んでいたことは、やはり幼年期の回想等、随所に書かれていることではあるが、その父がいままさに死のうとしている時期に、〈母〉の

〈物語〉が紡がれている。

それは〈父〉を殺すことによって、〈母〉を奪還しようとする試みであったに相違ない。字義通り、〈母〉恋いとはディブネコンソレーション〈父殺し〉の〈物語〉なのであり、作中で語られなかった注10〈父〉が〈母〉の大きさ・重さと釣り合つて隠されていたと言えようか。後年、取るに足りぬ存在としてにべもなく一行で片付けられている父が、だからといって存生中にも小さかったと言ふことは適切ではあるまい。この作に限つてのこととして言うのだが、無視とはその存在の大きさを逆照射している。だがそれだけではいかにも分かり切つた話なのであって、この作品テクニクのなかで〈父〉と〈和解〉し、憎しみの矢面に立つていた彼を〈救済〉しようという意志、無意識が働いていたことも、言い添えるべきではあろう。

やつと姿を現した〈母〉が、彼女の〈不在〉の〈悲しみ〉に外ならないという逆説は、どんな現実的な悲しみからも彼女を解放していたことは言うまでもないことだ。生きている間に父によつて与えられた悲しみ、例えば落ちぶれて生活の重みにまみれざるを得ない悲しみさえも、何ほどのことではないのである。〈物語〉を紡ぐこと、〈夢〉を見ること以外に〈母〉と出合うことが叶わないとするなら、〈母〉は父の、いや、たらくとは既に無縁である。〈母〉の発見は、そのまま父の無能への救し、肯定につづいていた。若く美しい〈母〉は、〈父〉

に汚染・略奪されぬ以前の姿をとどめている。〈父〉を抹殺し
 〈母〉を回復しようとする欲動の下に、〈父〉の〈救済〉、〈和
 解〉の動機が透けて見えている。〈母〉恋いの〈物語〉は父が
 死の床に臥すまでは書くことができなかつたものであろう
 し、それが母の死後二年の遅が語りかけることであつた。

と同時に、〈母〉の〈物語〉を紡ぐために、〈夢〉の〈母〉
 を仮構するために、作者↓谷崎が母にとどめを刺さなければ
 ならなかつたことも、言い添えるべきであらう。その〈宿命〉
 への愕然たる思いが〈物語〉形式への苛立ち、ためらいとな
 って表われている。それを〈物語〉を繰ることのできぬ作者
 の未熟と言つても良いし、作者（言説）と語り手（語り）
 との格闘と言つても良いのだが、夢を語る「夢語り」という
 形式の素朴さ、原初性、随所に發揮される作者による説明の
 胡散臭さ、統御の破綻、語り手の作者への服従を要求する暴
 力性や拙なさを、その証拠として提出することができるだろ
 う。

夢から醒めたあとに記述されていたこと、それが「私」の
 年齢であり、母の二年前の死の報告に近いことは先にも述べ
 た。それが夢語り↓〈物語〉を閉じさせ、そのなかを少年で
 ある「私」とともに歩き、その語り手であることを積極的に
 買つて出た「私」の覚醒後の意識であつたことも言うまでも
 ないことだ。ここにおいて少年であり大人であるという「私」

の二重化された意識||語り手の機能は一旦消滅し、したがつ
 て主人公の「私」||語り手の「私」——語り手という軸もな
 くなつたと言えるだろう。代つてあらわれたのが語り手の
 「私」||一人称の「私」——作者というもののなのであり、「私」
 は連続していてもその機能は一次的、二次的という違いがあ
 り、それらを直ちに結びつけることはできない。「私」||作者
 という距離ある支配の枠組みが、(近代)小説のものであつた
 とすれば、作者は末尾において語り手が伝える〈物語〉の意
 志を一旦阻んでいる、と言ふことができようか。勿論すぐさ
 まに反転して〈母〉の〈物語〉のなかへ回収されてしまふよう
 な下手なたくらみであつたとしても。そしてこのときに作者
 ↓谷崎潤一郎という断裂が発生し、谷崎潤一郎がもう一つの
 テキストとして現われる。作品と作者のはざまに〈母〉の、
 〈物語〉の、〈夢〉の誘惑が横たわっている。

行為||夢の円環の外に、それを包むようにして夢語り||〈物
 語〉があり、さらにそれを(近代)小説という枠が囲んでい
 る。それらを主人公、語り手、作者に対応することが可能で
 あるように見える。だがそんなことはまるで実態に叶つては
 いない。もう一つ、三重の円環の外に、谷崎潤一郎という円
 を用意すれば、それこそ作品は絵に描いた餅のように食えな
 いものになつてしまふであらう。

「私」の〈母〉||出口・終りにつづく道は真つ直ぐなのに、

いつのまにか入口・初めに彼は立ちもどっている。醒めない夢などはないのだから、「夢語り」は醒めたところからはじまり、醒めたところで終る。夢の終り＝初まりという文法がそのまま「物語」の文法に外ならないとすれば、「夢語り」→「物語」は、この覚醒＝「夢」の死＝「母」の死を遅延させるところに生まれていると言えよう。そして「夢」への欲望と「母」への欲望を結びつけたとき、それが「物語」への欲望と同義であったとすれば、作者↓谷崎潤一郎はその貧乏さゆえに永遠に「夢」を見る機械、物語る機械へと化してゆくのである。「物語」という、「夢」という、閉じられ開かれた迷宮に巢食うミノウスロス、半頭人身の怪物、へ自己愛ナルシズムに浸るものが彼だ。

ところがこの迷宮は、内部がそのまま外部であるような空っぽのものなのであって、内部／外部の境界の上を、決して解き明かせない謎＝「母」のまわりを、彼は永遠に歩き続けなければならぬ。ありもしない「幻」をとりあえずはあるとする「夢」＝「母」＝「物語」という「擬制」は、生と死のあいだに引き裂かれて、そのあいだを意味でもって埋めようとす徒勞、はかない望み、悲しみに根ざしている。それらがすべてそれ自体同語反復であったと言えば身も蓋もない仕業であらうか。だが谷崎はいま、そこに足を踏み入れようとしている。¹²

谷崎潤一郎が「吉野葛」(一九三二)「蘆刈」(一九三三)「少将滋幹の母」(一九五〇)「夢の浮橋」(一九五九)等、変奏曲ヴァリエーションを奏でていく「母」恋い「物語」の、その最初で、原基的な主題を「母を恋ふる記」は奏でていたのである。

注

- 1、千葉俊二は『鑑賞日本現代文学』⑧谷崎潤一郎(一九八二・一二)、角川書店「母を恋ふる記」「鑑賞」において、「夢の中で七つか八つの「私」とは、意識面においては、決して単なる「七つか八つの子供」ではなく、現在夢を見ている「私」の意識と夢の中の七つか八つの少年である「私」の意識(もしくは無意識)との二重構造を持つ」(85)と、語りではなく、おそらくは夢の意識構造について指摘している。
- 2、だが本当は、夢は醒めたときに醒めた意識によって「物語」化されるというよりも、すでにそれ自体「物語」化されていると解すべきであろう。破片化された、脈絡を欠いた夢もあるが(それは壊れてしまった「物語」のかけらかもしれない。醒めたあとで、夢は再現されざるを得ないのだから)、筋ストーリーを持った夢も随分と多いはずなのだ。こうした夢＝物語の実態について、端なくも露わにするのが批評する夢の存在であると思われる。とすると、醒めた夢を語るという「夢語り」とは、夢＝物語をなぞる「物語」、(「物語」)についての「物語」に外なるま

い。それは回復し得ぬ夢を取りもどすために、再び〈夢〉を見るときに悪夢にも似た行為だったかもしれない。

3、野口武彦は『谷崎潤一郎論』(一九七三・八、中央公論社)第七章「母性思慕の主題」において、「私」の眼の前につづく道が「過ぎ去った幼児期に向かつてひとの魂を遊行させる時間間の通路」(P.275)であったと述べる。

4、千葉は「一方が流動する、生きた水であるのに対し、他方は激んだ、死んだ水であるというこの対蹠的な光景」に注意を払うべきことを言い、〈海〉が「はじめから予感として感ぜられる」に対し、〈沼〉は「はじめは正体の分らないものとして少年を怯えさせる」「無意識界に抑圧した存在」「醜く容貌の衰えた老母のイメージ」を「象徴」したものだ(先掲書P.84-86)と述べている。

5、野口は、この道を「覚醒時には決して行きつけぬ夢の彼岸にひとを橋渡しするあの白道」だ(先掲書P.275)と述べ、遠藤祐は『谷崎潤一郎—小説の構造—』(一九八七・二、明治書院)所収「母を恋ふる記」—ひとすじの白道」という論において、これに対し、「仏説にいう二河白道のイメージ」があり、イエス・キリストが十字架を背負ってゴルゴタの丘へ歩いた「苦難の道」「へ十字架の道」とも呼ばれる。「悲しみの道」Via Dolorosa」だ(P.314-315)と言っている。一方、永栄啓伸は『谷崎潤一郎試論—母性への視点—』(一九八八・七、有精

堂)所収「谷崎文学における美学—母を恋ふる記」を中心に—という論において、二人の〈母〉のあいだの道についてではあるが、「胎内への道」「夢という形式をかりて、作者は禁断の母胎内への回帰を試みる」(P.142)と述べている。これについて遠藤は、中間部のこの場面が「へ死」の領域を掠めて通っていくものであり、そこでは「はじめから測られぬ無限のへつき」が流れている」(P.311-312)と述べる。

6、〈月〉〈海〉〈白〉〈道〉〈明るさき〉等、いずれも相互に絡み合っているのだが、〈明るさき〉ということについて二つほど挙げておこう。野口は直截的には〈月〉の〈明るさき〉について言っていないのだが、それが「乳色の光の霧に包まれた七、八歳の時間」(P.275)と関わっているらしいことが窺い知れる。遠藤についてもよく読み取れないのだが、その明るさが「月光のもたらす瞭らかな夢のごとき情景」と関わりがあるらしく、章題から推測すれば「真実」が示現するときの明るさを言うらしい。(P.305-310)

7、森安理文は『谷崎潤一郎あそびの文学』(一九八三・四、国書刊行会)所収「母を恋ふる記—虚構の挽歌」において、「若くて美しい女を狐だと思うのも、幼少時に母や側近の人たちから語り聞かされたり、また芝居や絵で見せられたりした民俗的な感情の発想であろう」と、信太狐の伝承との関わりを指摘している(P.359)。

8、野口は「三味線」の音色について、「谷崎を瞬時に幼年の昔に連れ戻す魔術的なキーノート」である（P.277）と述べている。遠藤は「三味線」の悲しい音色を通して「私」と「母」のそれぞれの悲しみが呼応し合っている（P.319—320）と述べる。

9、このことについて遠藤は、父の病臥に際して「あらためて、彼女はこの二二年へ此の世へにはいない事実が痛切に意識される」（P.288）という言い方で述べる。また森安は、千代夫人との不仲にもかかわらず、父の病いのために妻子ともども父の家に同居せざるを得なくなった谷崎が、この時期、その「恨めしい」「自己の運命」を痛感し、それが「現実の日常からのがれて、思いきり甘えられることのできる世界——「母なるもの」の世界への思慕」へ向かったとする（P.366—367）。

10、実は作中に父について触れられていない訳ではない。野中の一軒家を見出した「私」は、そこには父と母がいてその「年をとつたお父さんとお母さんが囲炉裏の傍で粗菜を焚いてゐて、帰ってきた「私」を「いたわつて下さるのではないかしら」と想像する。しかしそれだけで以降、言葉としても出て来ない。まるではじめからいなかったかのように。おそらく「父殺し」をする（＝「物語」を獲得する）際の痕跡が、家庭生活と結びついて残っているであろう。

11、例えば二人の「母」のあいだの道について、第一の「母」に拒否された少年は、それまでの道とは比較にならぬほどの長

い道をさらに辿らねばならないが、それは次のように書かれていた。明月に照らされた海を見ては「私は前にもこんな景色を何處かで見た記憶がある。而も其れは一度ではなく、何度も見たのである。或は、自分が此の世に生れる以前の事だつたかも知れない。前世の記憶が、今の私に蘇生して来るのかも知れない」と「私」は思い、途方もなく長い道を歩きながら、「私はもう此の世の人間ではないのかと思つた。人間が死んでから長い旅に上る、其の旅を私は今してゐるのぢやないかとも思つた」と。こうした説明のいかかわしきは、語りの破れ目から洩れた作者の書き言葉に違いないのであつて、語りを操ろうとする彼の意図を示していると言えよう。これを胎内への回帰といい、無時間・永遠への移行と言えば、作者の意図を額面通りに信じ込む訳で、「夢」・「物語」のなかでしか作者↓谷崎が「母」を求め得なかつた理由、そして語り手—作者の距離は、ついに見えることはないだろう。

12、本論は谷崎潤一郎と「母」恋い「物語」の考察を企てたものであり、彼と日本文芸の伝統的なジャンル、へものがたりとの関係については、別稿を用意せねばなるまい。